会員のひろば

北海道医報では、特定の個人・団体を誹謗、中傷する内容等を除いた幅広い多様性のあるご意見を掲載させていただいております。

愛犬シータとの毎日 犬を巡る三題話

札幌市医師会
マロニエ通　クリニック
越智（おち）さと子（こ）

１．我が家の愛犬シータは11才、ヒトの60才過ぎに相当し、白いものが混じり始めた。娘たちが幼い頃、大型スーパーに買い物に行くたび、入口脇ペットショップに入りびたり、犬を飼いたいとせがまれた。見識ある店主で、子どもが小さい間はおもちゃのように扱い犬のために良くない、飼うのは小学校高学年以降、と助言を受けた。次女12才頃、この機を逃すと一緒の時間が取れないと決断し、生後３か月の赤柴　雌を手に入れた。命名権をじゃんけんで勝ち取った次女、覚えたてのギリシャ文字から名前をθとつけた。飼うのを最後まで反対した連れ合いが最も耽溺、昔飼っていた犬の悲しいエピソードのためだった。長女が高校生の頃、通学帰りの駅から自宅まで、毎夜一緒に3.5kmランニングに伴走してくれた。子どもが家を離れた今は、高齢夫婦の散歩をマネージする存在だ。犬友を介す出会いあり、犬は自然に笑顔を呼ぶ。目をあわせると、セロトニン分泌が促されるとか。家族の一員以上の鍵（かすがい）で、家族LINEグループに朝夕散歩記録をアップ、離れていても癒やされる**（写真）**。これから、どれくらい一緒に過ごせるか？　ふと思いつつ、日々大事に過ごしたい。

２．大学でてんかん外科治療に携わっていた頃、犬と二人？暮らしの20代女性に出会った。薬剤抵抗性てんかんで、未明の強直間代発作時、彼女の犬はいつも直前に気が付き顔を舐めて起こしてくれる、という。入院し長時間脳波モニタリング中、それを実証できないか？　犬の同室を病棟師長に掛け合うも、当然却下。乳幼児でさえ同室にできないのに！と。静岡てんかん・神経医療センターでも無理。しかし、てんかん学の泰斗であるトロント小児病院の大坪　宏先生によると、カナダでは当然同室が許されるとのことだ。ウーム。彼女の発作は焦点切除後消失したので、確認の機会は喪われた。においに敏感な犬は飼い主の呼吸や匂いの変化を早々に感知するらしい。麻布大学獣医学部獣医学科小動物外科学研究室の齋藤弥代子先生によると、発作察知犬は訓練で育成できる訳ではなく、特異な才能だそうだ。

３．ペットの病気は言葉がない分、飼い主は大変気を揉む。てんかん発作を患う犬の飼い主の心痛、いかばかりと思う。イヌ用抗てんかん発作薬はヒト程多くはない。齋藤先生はイヌへの迷走神経刺激療法（VNS）を数多く扱い、良好な結果を報告されている。実は私共、てんかんの緩和的外科治療VNSの電池交換術で取り出した機材（残量８％以下）を、患者さん方の承諾を得た上で麻布大学に提供していた。今年正月、NHKで人工哺育白熊ピースの25年間成育の感動的ドキュメント番組が放映された。３才でてんかん発症、白熊は水泳中の発作で溺水しかねず、齋藤先生グループが予防用モニタリング装置を開発、レスキューできるようになったという。久しぶりにご連絡したところ、今はサル用装置を開発中とのこと。‘発作でサルは木から落ちる、白熊は溺れる、人は交通事故に遭う　種によりリスクが違うの’と笑っておられた。VNSは猫やネズミ、兎等の実験動物で実用化に至った機材だ。種を超え、双方に幸いが届くのは嬉しい。

最後に、犬に絡んだ本を紹介する。

＊犬がとなりにいるだけで　北川なつ　実業之日本社（セラピードッグの奇跡）

＊犬の伊勢参り　仁科邦男著　平凡社新書（日本人と犬の驚きの歴史）

＊アラシ　奥地に生きた犬と人間の物語　今野保著　ヤマケイ文庫（北海道の過酷な自然の中犬と人の絆を刻むノンフィクション４編）

＊ガルヴェイアスの犬　ジョゼ・ルイス・ペイショット著、木下眞穂訳　新潮社
（巨大な物体と犬たち　ポルトガルの小さな村のお話）

捨てられぬ１枚の写真 ～喉の小骨が取れた

札幌市医師会
新札幌パウロ病院
高階（たかしな）　俊光（としみつ）

小生もそろそろ後期高齢者の仲間入りで、趣味のタケノコ採り・山登りもできなくなり、女房もそれほど健康ではありません。また３つの癌、大病を患って元気なうちに終活しようと、気になっていたものが職場や趣味の仲間たちと撮った写真プリントです。今はスマホの時代ですが、昭和人間の私の時代は写真プリントです。そのまま処分するのも惜しく、数10人以上の旧友や元職場の人たち、趣味の登山や釣り仲間などに送ると、皆から感謝のお便りをいただきました。そして皆に送り終った後、さて家族の写真を整理していたら、どうしても捨てられない１枚の写真が出てきました。物心を覚えた時よりお世話になり28年前に亡くなった叔父さんの写真です。その娘さん、私の従妹の結婚式で、何よりもお酒大好き人間だった叔父ちゃんの満面の笑顔の写真は、そのものを現わしている懐かしい写真です。

娘さんは室蘭で結婚して転勤で大分に行き、夫の定年後に夫の実家、歌の抜群に上手で心に響いて伝わってくる大ファンの歌手細川たかし氏の出身地の真狩村に移り住んでいるとの記憶があったものですから、ネットなどで当てずっぽうに調べて写真を送る前に実際に届くかテストを兼ねて真狩村の字（あざ）までの住所を書いて、ハガキに事情を説明して投函しました。お久しぶりですと書き出したものの約50年、半世紀以上も会っていません。ハガキは送り返されなかったことから届いていると思いました。

今年は昭和100年ですが、昭和30年代、叔父ちゃん夫婦の新婚の時、木造の我が社宅の長屋に間借りしていました。長屋の間取りは奥の押し入れのある６畳間（いわば寝室）と便所の入り口、ストーブのある６畳間の２間でした。なお便所をトイレと呼ぶことを後になって知りました。

叔父ちゃん夫婦はそのストーブのある居間の半分にベッドを入れ、カーテンで仕切っていて間借りしていたのです。お袋も弟夫婦だし「そうかい、そうかい」と言って了承していました。５、６歳だった小生は叔父ちゃん夫婦が「いつも見つめ合っている」ことが不思議でならなく、いつも見つめ合っているとよく口走っていたので、生意気な小僧と閉口していたことでしょう。後になって父親の甥っ子も同じように間借りしていました。これは昨今では到底考えられませんが、どうして６畳の居間の半分に間借りができたのだろうかと考えると、それはみんな生きるためであり、当時は親戚の持ちつ持たれつの結束が、ファミリーを中心とした絆が強かったのだと思います。何せ戦争が終わって10年余りの時代です。何かと気せわしい世の中と感じている爺さんですが、当時のゆっくりとした時代の流れが懐かしいです。

振り返って思い出してみると、物心ついたころ電燈は裸電球でしたが（田舎の親戚の家ではランプでした）、水道・ガスはなく水は天秤棒で汲みに行って水瓶（みずかめ）に入れていました。冬はよく水瓶に氷が張っていたものです。幼いころ父のタバコを悪戯で吸ったところ辛くて辛くて水瓶に走り頭を突っ込んでうがいをしたことがあります。子供心にも悪いことをしたと思い、父を見たら笑っていました。いい思い出です。職工長屋はどこも収入はみな同じで、隣は子供４人もいました。

２歳の時に弟が生まれた時、立ち会っていたところを覚えています。1954年９月の洞爺丸台風では多くの人が亡くなったと父母が沈痛な思いで話していました。1959年９月の伊勢湾台風の時、父は不在で、とても酷い風でガラスが割れないように、お袋が毛布を木の窓枠に内側から釘を打ちつけていました。子供の目にも不器用でガラスが割れると思ったものです。

中学生になって小生と弟は押入れをベッド代わりに寝ていました。奥の６畳間に勉強机が入りカーテンで仕切られていましたが、夜中に便所に行くにしても親父とお袋の寝顔を跨いで行ったものです。ある夜中に豆電球の明かりの下でトイレのために居間に出たところ、天井から大きなクモが目の前に垂れ下がっており、腰を抜かしてしまったことがあります。勿論クモも慌てて糸を手繰り寄せスルスルと天井に上がっていき、本当にゾッとしたものです。

叔父ちゃんは娘３人をもうけました。奥さんが39歳の時に脳溢血で半身不随になり仕事と子育てに苦労したのですが、弱音を吐くことはありませんでした。奥さんに先立たれた後亡くなったのですが、そばに酒瓶が転がっていたと聞いて、叔父ちゃんらしい亡くなり方、本望だったと思いました。小生と女房が結婚して初めて室蘭のお袋宅に行った時に、叔父ちゃんが車で東室蘭駅までニコニコ顔で迎えに来てくれた心遣いが嬉しかったなぁ。

たった１枚の写真がタイムスリップして物心のついた約70年前頃より中学時代まで、忘れていた当時の風景・日常などを走馬灯のように蘇らせてくれ凄い力があると思ったものです。そんなんで捨てたらバチ当たりものです。

後日、真狩村にいる従妹の住所を確認して、写真を送った次第です。まずは何よりで喉の小骨が取れたように心の引っ掛かりが解消しこれで小生も成仏できます。

幻の道都・旭川の記憶

遠軽医師会
JA北海道厚生連遠軽厚生病院
柳川（やながわ）　伸幸（のぶゆき）

インバウンドの影響とはいえ、札幌での宿泊代が信じられないほど高騰している昨今、北海道のはずれに居を構えている者にとって、札幌という街をつい遠く感じてしまうのは、筋違いなのか。私は生まれも育ちも旭川だが、そういえば、私が幼い頃―昭和40年代から50年代ごろの旭川では、大人たちが札幌のことをあまり良く言わない空気があったように思う。父は旭川、母は空知の出身だったが、親戚の集まりや近所の会話のなかで、「札幌はなんでも自分たち中心だ」といった言葉を何度か耳にした。

もちろん、そうした人々がすべて、かつて旭川が道庁の移転候補地だったことや、上川離宮という壮大な構想があったことを知っていたとは思えない。ただ、どこかに「本当は旭川にもそれだけの価値があった」という、誇りと悔しさの混ざった感情が、街の空気の中に漂っていたように感じる。それは単なる地域間の対抗心ではなく、歴史が生み出した記憶の名残だったのかもしれない。

実際、旭川は明治時代、北海道の行政の中心地として道庁を誘致する構想が真剣に検討された都市だった。1909（明治42）年、札幌にあった道庁庁舎が火災で焼失したことをきっかけに、道庁移転論が持ち上がり、その有力候補として挙がったのが旭川である。

当時、旭川は屯田兵村の設置や陸軍第七師団の進出といった国家的プロジェクトを背景に、急速に発展しつつあった。さらに注目されたのが、広大な御料地の存在である。御料地とは、明治政府が皇室財産として管理した特別な土地で、上川離宮の構想に伴い、現在の神楽岡、緑が丘、西神楽、隣接する東神楽町一帯など、忠別川と美瑛川に挟まれた台地が指定された。これらの土地は、軍事や農業のみならず、将来の都市機能を担う場として高く評価されていた。

さらに、旭川の御料地には、明治天皇の北海道巡幸に備えた「上川離宮」の構想が進められていた。上述の清らかな２つの川に挟まれた豊かな自然環境に、離宮用地が整地され、植樹や測量も行われたとされる。この計画は明治天皇の崩御により中止されたものの、皇室の離宮候補地となるほど、旭川が国家的に重視されていた証といえるだろう。

しかし、このような旭川の台頭に対して、札幌をはじめ小樽もが強い警戒心を抱いた。すでに官庁、大学、鉄道網などを整備しつつあった札幌にとって、道庁の移転は都市の命運を左右する問題であり、新聞や政界では強い反対の声が巻き起こった。このとき築かれた対立構造は、その後、両都市間の感情的な軋轢を生むことになる。

結局、道庁は札幌に再建され、旭川への移転案は幻となった。札幌はその後、北海道の圧倒的な中枢都市へと発展し、旭川とは人口も経済規模も大きな差がついた。今日の旭川市民には、一極集中の現実を受け入れた上での諦念がある。一方で、札幌市民の多くにとっては、旭川はもはや競争相手ではなく、意識の外にある存在なのかもしれない。

それでも、かつて御料地として皇室の名のもとに整備され、上川離宮の構想を託された土地の記憶は、旭川にとって静かな誇りであり続けている。整然とした都市設計、豊かな自然、北海道のほぼ中央に位置するという地の利とともに、その記憶は今も静かに生きている。かつて「もう一つの道都」として期待された都市の姿は、過去にとどまるものではない。北海道が多極型の未来を模索する時代において、旭川の持つ可能性は、再び注目されるべき価値を秘めているのではないだろうか。

私自身、現在は別の地で暮らし働いているが、旭川に帰るたびに心が和み、自然と肩の力が抜ける。街の景色や空気、歩く速度までが身体に馴染んでいるのを感じると、「ああ、自分はやっぱり旭川が好きなんだ」と素直に思う。歴史に刻まれた夢と記憶が、今の旭川に静かに流れ続けていることも、その愛着の理由なのかもしれない。

脚ブロックに惑わされない

札幌市医師会
（公財）北海道労働保健管理協会　札幌総合健診センター
中村（なかむら）　一博（かずひろ）

心電図読影において、陰性Ｔ波の原因を考えるためには、まず「二次性ST-T変化」について理解しておく必要があります。

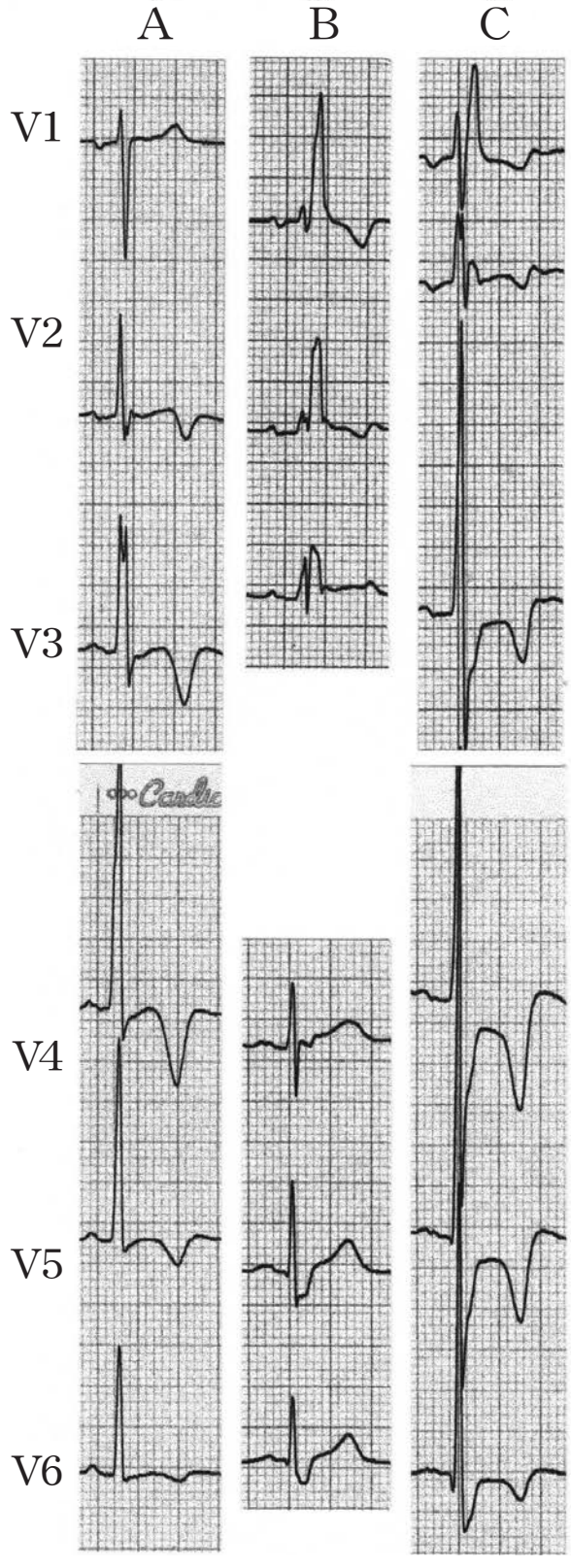
右の心電図は当センターの自験例です。Ａは肥大型心筋症、Ｂは完全右脚ブロック、Ｃは肥大型心筋症と完全右脚ブロックが合併した心電図です。Ａ、Ｂ、Ｃとも別々の受診者さんのものです。まずＡではＶ３～Ｖ５誘導に高いＲ波と左右対称の深い陰性Ｔ波を認めますが、これは肥大型心筋症に特徴的な所見です。このように心筋の障害（虚血や肥大など）が原因となるST-T変化を「一次性ST-T変化」と言います。

では、次にＢを見てみましょう。この心電図ではＶ１誘導にrsR’パターンのQRSと陰性Ｔ波、Ｖ５誘導に幅の広いＳ波と陽性Ｔ波を認め、完全右脚ブロックと考えられます。脚ブロックでは心室内の興奮が正常な心室内伝導路（ヒス束→両脚→プルキンエ線維）から外れたところを通るため、Ｔ波がQRSの最後の振れと逆向きになります。ＢのＶ１誘導のＴ波が下向きなのは、心室の興奮伝播過程の異常が原因であり、虚血や肥大など心筋それ自体の障害によるものではありません。これが「二次性ST-T変化」で、脚ブロックやWPW症候群などに見られます。

最後にＣの心電図を見てみます。Ｖ１誘導にはrSR’パターンのQRSと陰性Ｔ波があり、ＢのＶ１誘導と同じ、完全右脚ブロックの所見を認めます。しかし、Ｖ３～Ｖ６誘導では、本来、完全右脚ブロックのため上向きのはずのＴ波が、左右対称の深い陰性Ｔ波となり、ＡのＶ３～Ｖ５誘導と酷似しています。この部分には肥大型心筋症による「一次性ST-T変化」が現れているのです。

「完全右脚ブロックのときは、二次性ST-T変化のため陰性Ｔ波が現れ、それは心筋の障害を示唆するものではない」という中途半端な知識だけでは、かえってＣの心電図を正しく読影する妨げになります。この説明では、その陰性Ｔ波が一次性ST-T変化によって出現した可能性については考慮されていません。完全右脚ブロックがあれば、他に心疾患がないわけではありません。むしろ、脚ブロックの原因として、虚血性心疾患、心筋症、心筋炎などが挙げられるので、完全右脚ブロックを見つけたら「完全右脚ブロック」のみの診断で満足せず、他の器質的心疾患との合併を疑いながら、一次性ST-T変化の有無についても注意して読影すべきだと思います。

一次性と二次性のST-T変化がどのように現れるかは、心筋障害の広がりと重症度、心室興奮伝播の異常の度合いによって決まります。陰性Ｔ波について、その原因の一つに脚ブロックによる「二次性ST-T変化」があること、さらに脚ブロックがあっても、心筋障害による「一次性ST-T変化」が出現する可能性があることを知り、脚ブロックに惑わされて心筋症や虚血性心疾患などを見逃さないよう、十分に注意してください。



セレンディピティと連想の行き着くところ

札幌市医師会
柴田（しばた）　睦郎（むつお）

能登半島地震

令和６年１月１日16時10分頃に発生した最大震度７の地震で、石川県輪島市や珠洲市中心に多数の死傷者を含む大きな被害が報告された。直後より住民は元より関係諸機関、交通手段を得てからはボランティア諸氏も加わり、復旧の努力が続いている。現在はライフラインや社会生活の復旧・復興及び再生の動きが本格化している段階と評価されている。

同年２月23日の天皇誕生日に陛下と皇后様を撮影した写真には、机の上の石川県の工芸品である輪島塗御懐紙箱や、隣の棚の珠洲焼窯変壺が映り込んでいた。国民の幸福を祈る今上天皇の思いの表れの様に思えた。元参院予算委員長の二地域居住「能登モデル」を巡る無配慮な発言を思い出す。

輪島塗職人の言葉遊び

輪島塗で思い出すことがある。2006年刊の岩波新書　阿刀田高著　「言葉遊びの楽しみ」に能登の文芸だんだらに関して、木村功著の「不思議な日本語段駄羅」と、中村裕編の輪島段駄羅同好会冊子が紹介されている。一例は下記のとおりである。囲碁に関する一句であろう。「よう」は良くのウ音便である。第二句が二重の意味を持つ。

甘党は羊羹が得て
　よう考えて　石を置く

江戸時代に俳句から誕生し能登の職人や商人に親しまれ、現在は輪島地方で愛好されていると言う。

日常生活の文芸

江戸から輪島に俳句から形を変えて伝わった段駄羅の連想で取り出した本がある。それは、1967年発行の鶴見俊輔著「限界芸術論」勁草書房である。芸術の発展の章末に芸術の体系という一枚の表があり、行動の種類　書く→読むの欄に限界芸術（手紙、ゴシップ、月並み俳句、書道、タナバタ）、大衆芸術（大衆小説、俳句、和歌）、純粋芸術（詩）という分類が提案されている。その中に日常生活に深く根を持っている芸術と関連するものとして、宮沢賢治の修学旅行復命書が引用されている。この修学旅行は1924年５月19日から23日にかけて、花巻農学校生徒と一緒に来道した際の記録である。札幌では北大植物園、札幌ビール工場、北大農学部、中島公園などを訪問している。

宮沢賢治イーハトーブ札幌駅（石本裕之著　2005年響文社）

鶴見俊輔は前述の書で、宮沢賢治が岩手県の個性的なマイナスをすべてプラスに変えて作り出した理想郷を「イーハトーヴォ」と呼んでいることを述べている。この本の著者石本裕之（旭川高専教授）は、賢治が三度（自分自身の修学旅行、引率した花巻農学校修学旅行、妹トシとの旅行）来道した際のイメージを詩作に活かしていることを示している。この本の発行者は、高橋哲雄響文社社長である。

年度報告書の編集

今から30年程前に、勤務先で年度報告書の編集委員長をすることになった。何事も形から入るたちなので、校正の通信教育を受けることにした。

報告書には必ず統計が載るが、以前に実務統計の通信教育を修了していたので、数字の扱いにはある程度の自信があった。この講座の成績が良好であったので、生涯教育２級インストラクターの資格取得の勧めがあった。この報告書の外注先が札幌の出版社で、担当は高橋哲雄さんという方であった。何度か打ち合わせをしたが、その時の雑談で、高橋さんが響文社の社長さんで、朗読CD付きの詩集を発行したということを聞き、その斬新さに感心したことを思い出す。後に私は趣味の川柳の句集を川柳専門の出版社から出すことになるのだが、自著を出版するとは思ってもいなかった。高橋社長がお元気なら連絡してお話をしたいと思い検索してみたところ、既に亡くなり会社も廃業したことがわかった。秋に三冊目の句集を出版する予定なのだが、その句集には音声ファイルの二次元バーコードが印刷されることになっている。

日向の匂い

札幌市医師会
竹田眼科
竹田（たけだ）　眞（まこと）

もう何十年前のことだろう。ちいさな男の子が思う存分夏の日差しの中を走り回って、日陰に涼んでいた私の膝にちょこんと座って一休み。その子の頭から「日向の匂い」がした。むっとむせ返るような、エネルギーに満ちあふれた、それでいて爽やかで一寸香ばしい若々しい匂いである。若気の至りで喫煙習慣を30年弱続け、飲酒習慣もそれに追い打ちをかけて、いつしか私の嗅覚はほとんどゼロになってしまった。草いきれも、甘い砂糖の香りも石炭酸の臭いをまとった母の匂いも全く感じなくなってから久しい。ただ口に含んで鼻に抜けさせた赤ワインの香だけは馥郁と感じるのは不思議である。そんな私にも可愛い男の孫がまた授かり、部屋中を走りまわって、私の膝の上で一休みした。その時突然私の脳裏にあの香ばしい「日向の匂い」が古い記憶と共に蘇った。そう、自分にも嗅覚が有ったことがあるのだ！

老子は、〔見れども見えないものを「夷」、聞けども聞こえないものを「希」、触ろうとしても触れないものを「微」という。我々が追い求めている「道」とは、そのような存在なのである〕と言っている。傘寿を目前にして、私の五感はどれもこれも劣化が激しく、まるで妄想の世界に住んでいるようである。感覚器が衰えると、感性も鈍くなる。感性が鈍くなると妄想もビビッドではなくなると思うのだが、妄想だけはかえって強くなるようだ。こんな私はきっと「道」を極めるのに一番適していると思い、日々を暮らしている。きっと死ぬ前に悟りが開けるだろう。そして自己満足的達成感の中に安らかに「死」を迎えることが「夢」である。

まだ40代の頃、患者さんに内科医師の奥様がいた。訴えが定まらず、重大な眼疾も見つからないタイプの人であった。時々ご主人も一緒に来られて話を聞いてくれる。或る時その先生がぽつりと話された。「先生（私）を見ていると若い頃を思い出します。今は年を取って新しい知識は頭に入らず、患者さんも減って、古い医療を細々と続けているだけです。でも時に私でなければ治せない患者さんが来ます。そんな時は私もお役に立ってると実感できます。今はそれが生きがいです」その時はなるほどそうなのか、と思った。

ふと現実に戻ると目の前に患者さんがいる。さてこの人の今日の訴えは何だろう？　その根本には何が潜んでいるのだろう？　私はこの患者さんの役に立てるだろうか？　私より他の誰かに診療を依頼した方が良かろうか？」、「一体診断は何だろう、適切な治療法は有るだろうか？」、「現代医学的には原因不明だが、漢方的に打つ手は有るか？」、「それよりなにより、私は現代医学的な知識を十分持っているか？」、「保険医として真っ当にやっているのか？」、考え始めると心は千々に乱れる。引き際は誰かが決めてくれるだろう、と他力本願の日々である。「もうそろそろ潮時ですよ」と言われるまで、「先生長生きしてくださいよ」、「先生だけが頼りです」などという言葉に甘えて、死ぬまでこの幸せが続いてくれたら、そしてそのことが誰の迷惑にもならなければ、こんな嬉しいことはない。

北海道医報「会員のひろば」投稿募集

◇情報広報部◇

北海道医報では、「会員のひろば」への投稿を募集しています。記事の内容は自由です。医療情勢、診療で日頃から感じること、趣味・紀行、エッセイ、自己紹介等でも可です。

1．記 事 制 限：1記事あたり1ページ以内。
2．文　字　数：600～1,000字（1段分）または1,600～2,000字程度（2段1ページ分）
　　※いずれも写真・図含まず。
3．掲　　載：掲載可否および掲載号は広報委員会にて決定します。
4．原稿送付先：ihou@m.doui.jp
5．問い合わせ先：011-231-7661（情報広報部）